

江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当：中島慶二

日本人最初の
マグサイサイ賞受賞者

アジア地域で社会貢献などに傑出した功績を残した個人や団体に贈られる「アジアのノーベル賞」とも称されるマグサイサイ賞は一九五八年（昭和三十三年）に発足し、緒方貞子氏、中村哲氏など、これまで多くの日本人が受賞しているが、日本人としての最初の受賞は昭和三十三年、当時岡山県知事だった三木行治氏である。社会指導部門の受賞として、地方行政や保健衛生の近代化の分野における卓越した功績が評価されたとされている。

岡山医科大学を昭和四年に二六歳で卒業後、医師として地域の診療所に勤務し、その後九州帝大法文学部に入學、昭和一四年に行政官として厚生省保険院に転職した三木氏は、昭和一九年四一歳で厚生

省健民局健民課長、二〇年一〇月同保健課長、二一年一月に厚生省公衆保健局長（二三年に公衆衛生局に改組）に就任した。

公衆衛生局長在任時に郷里の関係者の粘り強い推挙運動に押され、昭和二六年の岡山県知事選挙に出馬し当選、その後在任中過労により六一歳で亡くなるまで一三年あまり、知事を務めた。マグサイサイ賞を受賞したのは亡くなる一カ月前である。

激動の時代と
三木氏の貢献

三木氏を取り上げた理由は、国立公園行政との関係について触れるためである。

昭和二〇年一月二〇日、厚生省が内閣府に出向していた石神甲子郎技師を健民局保健課に迎えて国立公園行政が再始動したとき、石神氏に指示したのは三木課長で

あった。

このころの行政の動きをかいつまんで紹介しよう。

昭和二一年二月には戦争のため停止されていた国立公園行政の事務が復帰、昭和二二年五月には全国からの国立公園指定要望を踏まえた「国立公園施策確立に関する件」を各県知事に通知している。

昭和二二年七月には国立公園部設置に関する閣議決定がなされ、実際に二三年二月一四日に国立公園部が発足（飯島稔部長が就任）、二月二三日に第一回国立公園中央委員会への「現下の情勢に即する国立公園施策を伺いたい」との諮問がなされる（この時の諮問説明は三木局長）。

昭和二三年四月から八月にはリッチー氏の来日調査が行われ、それも受けた形で昭和二四年五月には国立公園法の改正がなされ、さらに昭和二四年五月の支笏洞爺国立公園指定から始まる指定拡張の動きが続く。まさに激動の時代だったと言える。このころ、担当課長・担当局長として国立公園行政の再出発を力強く支えたのが三木行治氏だった。

昭和二六年
「日本の国立公園」の記述

三木氏が直接関わったのはおそらく国立公園部設置まで、または国立公園部が官房に移管された昭和二四年六月までと想像されるが、昭和二二年に行われた「係から部への昇格」は、その後の国立公園行政の発展に大きく寄与したことは間違いない。

昭和二六年九月国立公園協会発行の「日本の国立公園」には、このことに三木氏がどのように関わったのが具体的に記されている。「さて片山内閣となつてからは、一松大臣は頗る積極的で、予て三木局長の抱負でもあった国立公園局設置の政治的工作が開始された。中央に局を、地方にも管理機関を設置し、アメリカ型の行政機関を実現しようとするものであつて、これに要する経費六、六〇〇万円を計上して省議を纏めたが、大蔵省で削減されて、七月の閣議で追加予算として部を設置するに要する経費等五五〇万円となった。しかしこれは公衆保健局調査課の一つの係に過ぎなかつた国立公園係を、一躍部に昇格せしめるもので、

関係者を狂喜せしめたのは無理もなかった。これにより国立公園史上では、一松大臣は安達謙藏と並んでの恩人といわれることになった。しかしこれを献策した三木行治の功績を忘れてはならぬ。」(国立公園協会(一九五一)「日本の国立公園」p五七)

「私なき献身」

三木知事が逝去したのち、知事の功績や人徳を偲んで編まれた本が「私なき献身 三木行治の生涯」(一九六六)である。編集発行は財団法人故岡山県知事三木行治顕彰会。岡山県知事時代だけでなく、親交のあった各界の人々が文章を寄せている。口をそろえて三木氏の人徳を称え、知事時代だけでなく国立公園行政以外の厚生省時代の功績も数多く紹介されている。

三木氏にとっては公衆衛生分野が主たる仕事の舞台であった。保健所の組織体制の一本化や結核予防対策など、新憲法のもとでほとんどの所管法を改正するなど、戦後の厚生省の体制をつくった一人といっても過言ではない人物である。



三木ヶ原の一角に建つ休暇村蒜山高原

知事時代には大山隠岐国立公園蒜山高原の開発に力を注ぎ、「西の軽井沢」の愛称普及、国民休暇村の誘致やジャージー牛導入などを主導した。地元民は蒜山高原の一角を三木ヶ原と名付けてこれに込めている。

国立公園雑誌 アーカイブ空白期

先日公開が始まった国立公園雑誌のデジタルアーカイブであるが、戦後の復刊第一号は昭和三年八月号である。既に国立公園部は発足し、復刊第一号に寄稿している



ジャージー牛と上蒜山

のは飯島稔国立公園部長である。すなわち、戦時下で休刊となった「国土と健民」の最終号である昭和一九年五／六月号からの四年間、雑誌国立公園が発行されていなかった時期が、国立公園行政再出発に向けての激動の時代だったとすれば、その激動の時代を、造園や公園の専門職員とともに支えたのが三木氏や飯島氏だったということなのかもしれない。しかし残念ながら公園雑誌には三木氏の寄稿はない。

不明ながら最近まで三木行治氏のことを知らずにいた。岡山県人



国立公園編入記念に三木ヶ原に作られた愛の鐘。カップルで鳴らせば幸せになる

(写真：自然公園財団 鳥取支部 祝原幸治)

なら誰もが知る郷土の偉人なのだと思うが、国立公園に関係する者としても、国立公園の歴史をつくった一人として忘れてはならない人物であろう。

参考・引用文献

国立公園協会(一九五二)「日本の国立公園」
財団法人故岡山県知事三木行治顕彰会(一九六六)「私なき献身 三木行治の生涯」
環境庁(一九八二)「自然保護行政のあゆみ」
自然公園財団HP「国立公園」デジタルアーカイブ

中島 慶二●なかじま けいじ

一九八四年環境庁(当時)入庁、野生生物課長などを歴任。二〇一七年より江戸川大学国立公園研究所長。二〇二四年より(公財)日本鳥類保護連盟専務理事。